

の国の経済力を考えた時（1人あたりの GNP は日本の約 45 分の 1）、これがいかに国家的に大きな支援を受けているかがわかる。近い将来にその成果があらわれてくると期待されるが、特に若手を中心にモデル関係者の意気込みには、なかなかすごいものがあるように思われた。

3.3 INSAT が威力を発揮し始めた

最近導入された新兵器といえば、気象衛星 INSAT がある。1984年に打ち上げられたこの衛星のデータもすでに数年の蓄積があり、そのなかでの多雨年・少雨年の季節内変動の起こり方の違いや、シノプティックな擾乱の振舞いなどについての発表がいくつかあった。IMD の Kelkar らによれば、1986年からは、降水量の見積りも行われており、NOAA に比べると格段によい解像力により、精度が向上しているそうである。ただしこのデータは本来予報用ということなのか、インド人の研究者にとっても必ずしも使いやすい体制になっていないようで、それに関して不満を述べる者もあり、内情を垣間見た感じがした。

INSAT と直接は関係しないが、印象深かったのは、80歳を越えたという大御所 Pisharoty が、低 OLR あるいは 200 mb での発散の中心がインドの真上ではなく、ベンガル湾ないしはもっと東方にあることに、ショックを受けていたことである。陸上のデータだけをみているのと随分ちがうものである。とくに、インド洋上はデータがきわめて乏しいところだっただけに、今後新しい知見がふえていくことであろう。それと同時に、インド人研究者の視点がインド国内だけでなく、グローバルに広がっていく契機になることが期待されよう。

なお数値モデルを動かすためにも、インド洋・アラビア海は、通常の気象観測データの乏しいところゆえに、

INSAT からの情報がきわめて重要になっていることはいうまでもない。

3.4 おわりに

最後に簡単に全体の感想を述べて終わりたい。IITM 所長の Sikka 氏のすぐれた指導力のもとで、世界を代表するモンスーン研究者たちとともに過ごすことができ、大変有意義な経験をさせていただいた。1987年の12月に初めてインドへ行って帰ってきた時には、あまりのカルチャーショックの大きさに、当分は行くまいと思っていた。それからわずか1月もたたぬうちに、講演者としての誘いがあった。この時思わず、「行きます」と言ってしまったことに、インドとの出会いの妙を感じている。インドの魅力はとてども1~2回行っただけでわかるものではない。「また来ることがあるだろう」今回はそう思ってインドを飛び立った。

シンポジウム参加に際しては、日本気象学会から発表者として推薦していただき、また国際学術交流基金から出席補助金を出していただいたことに対し、厚く御礼申し上げます。またインドとの出会いを最初に与えて下さった、筑波大学地球科学系の安成哲三氏にも、誌上を借りて謝意を表します。

参考文献

- Kato, K., 1989: Seasonal transition of the lower-level circulation systems around the Baiu front in China in 1979 and its relation to the Northern Summer Monsoon. *J. Meteor. Soc. Japan*, 67, 249-265.
- 安成哲三・栗原弘一, 1986: 「インド・モンスーン長期予報 100年」記念国際セミナーに参加して, *天気*, 33, 529-536.

月例会「長期予報と大気大循環」の講演募集のお知らせ

表記月例会を下記のとおり開催いたします。今年の主題は「力学的長期予報の現状と将来」です。講演を希望される方は下記の要領でご応募ください。

日程：1990年9月21日（金）13時から

場所：気象庁

申込方法：題目、講演者氏名、所属、および400字以内にとめた要旨を添えて申し込んでください。

申込先：〒100 東京都千代田区大手町1-3-4

気象庁予報部長期予報課 林 久美

申込締切日：1990年7月20日必着